

## 令和7年度第2回亀岡市環境基本計画推進会議

開催日時	令和8年1月21日(水) 午前10時～正午
開催場所	Circular Kameoka Lab(サーキュラーかめおかラボ)
出席者	田部委員、船越委員、山脇委員、長尾委員、山内委員、井上委員、村山委員、中川委員、赤井委員、中澤委員、伊藤委員、多胡委員、高橋委員、山内幹事(事務局3名)
欠席者	芦刈委員、豊田委員、藤岡委員、出野委員、國府委員
傍聴者数	1名
次第	協議事項 ・亀岡市地球温暖化対策実行計画(区域施策編)別冊 最終案について 報告事項 ・「かめおか脱炭素未来プラン」進行管理について 講演 ・「企業・行政などの各分野におけるサーキュラーエコノミーの活動事例紹介について」 講師:株式会社ごみの学校 代表 寺井 正幸 氏

### 1 会長挨拶

### 2 協議事項

#### (1)亀岡市地球温暖化対策実行計画(区域施策編)別冊 最終案について

≪資料に沿って事務局から説明≫

#### 会長

太陽光発電のライフスタイルコストについて、最終的な処理費用も資本費に含まれるという認識でよいか。

#### 事務局

ご認識のとおり、廃棄の費用も含んだものである。

## 委員

太陽光発電のライフサイクルコストについて、現在の優遇制度が終了すると買取価格が1キロワット当たり8～9円になると考えられる。資料の内容に基づいて計算すると、住宅用の太陽光発電を設置するには損失を覚悟する必要があるということか。

## 事務局

従来の固定価格買取制度(FIT)によるメリットが薄れ、今は自ら発電した電気を自ら使用する自家消費型へと移行している。国もFITから自家消費の促進に移行しており、本市でも家庭向け太陽光発電の補助制度を自家消費型を対象に拡充する予定だ。初期投資の支援を通じ、全体のライフサイクルコストの低減を目指している。

## 委員

東京都などが新築住宅に太陽光発電の設置を義務付ける一方、外国製パネルへの依存や将来的な廃棄について懸念がある。国産の新素材「ペロブスカイト」の低コスト化にも期待が集まるが寿命の短さが課題となっており、それぞれメリットとデメリットがあるため、複合的に考える必要がある。また、太陽光発電を有効に使うためには蓄電池が重要となるが、普及が進んでいない。このような状況を踏まえて、将来的な見通しをお聞きしたい。

## 委員

蓄電池に関して、電気自動車に搭載されたバッテリーも活用ができると聞く。電気自動車への補助金を設けている自治体もあり、電気自動車を含めたトータルなエネルギー利用を考えることが重要ではないか。

## 事務局

本市においても電気自動車のバッテリー活用は効果が期待できるため、今後、国の補助金の活用や京都府との連携などを進めながらエネルギーの効率化を進めていきたい。

太陽光発電については、初期段階ではFITを通じた売電が中心だったが、近年になり廃棄問題やパネルの国産化の重要性が認識されてきている。今後はペロブスカイトなどの新素材が普及し、国産パネルの増加やコストの低下を期待している。

## 委員

本計画には太陽光と木質バイオマスが含まれているが、小規模な風力発電の実現可能性はどうか。

## 事務局

本市では、2050年の長期目標と2030年の短期目標の2つの軸でロードマップを描いている。2030年に向けては導入が比較的容易な太陽光発電を推進しているが、他のエネルギー資源の活用も重要だと認識している。近隣市町村には小型風力発電の研究に取り組む企業もあることから実用化に期待を寄せている。

あわせて、生活系バイオマスの利用によるエネルギー高効率化も検討しており、環境保全を考慮しながら多様な自然エネルギーの活用を目指したい。

## 委員

J-クレジット制度について、慣行農業の場合、中干し延長が米の品質に影響を与える可能性があり参入が難しいのではないかと考える。有機農業の方がJ-クレジット制度に向いていると考えるがどうか。

## 事務局

有機農業の方が参加しやすいということではなく、慣行農業においても実施ができるため、有機以外の方にも十分活用いただくメリットはある。猛暑で中干し延長ができないといった天候による問題や事務手続きの手間などが参入障壁かと思うが、引き続き制度への理解の醸成と周知啓発に取り組んでいきたい。

## 委員

J-クレジット制度は事務手数料が高く、生産者の利益が少ない印象がある。特に森林系ではその傾向が顕著だ。

効率的な脱炭素化のためには、蓄電池や自動車など個別に補助金を創設するのではなく、全体を考慮した総合的な制度設計が必要ではないか。

## 事務局

本市では、J-クレジットの売買方法を独自に「亀岡モデル」として進めている。その特徴としては、民間企業と連携したスケールメリットによる事務コストの低減と生産者への還元、市内事業所のクレジット購入による地産地消の推進があげられる。行政が取り組む事業ならではの地域還元の仕組みができあがりつつあるため、J-クレジット制度も有効な脱炭素施策であると考えられる。

## 委員

近年、太陽光発電事業の譲渡時に住民説明などのハードルが高く、事業の引き継ぎがスムーズに行われず大手企業も苦勞していると聞く。市として将来的な展望はあるか。

## 事務局

FIT 利用のケースが多く、その場合、国が所管となるため本市への相談は少ないが、事業継承は課題と認識している。本市では、地域新電力会社である亀岡ふるさとエナジー株式会社に出資し、小売業を展開することで事業の継続性や安全性を確保しようとしている。この取組を通じて、地域の発電事業者との連携を進めていくことが重要だと考えている。

### 3 報告事項

#### (1)「かめおか脱炭素未来プラン」進行管理について

《資料に沿って事務局から説明》

##### 委員

公共施設のLED化率が20%前後という結果は低いのではないかと。多くの企業がLED化を進めている理由は、電力削減に即効性があり、投資回収が早いからだ。2030年の目標達成に向けて短期間でできる省エネの方法を検討する必要がある。LED化を進める良い機会だと考え、キャンペーンを展開してはどうか。

##### 事務局

公共施設の性質上、予算や将来的な運用見込み等の関係で一律かつ短期間でLEDを進められていない状況がある。蛍光灯の製造中止が近づく中、引き続き関係者と調整を図っていきたいと考えている。

##### 委員

運輸部門の取組について、市としてノーマイカーデーや公共交通の利用促進をしていると思うが、進行管理に含まれないのか。

##### 事務局

ご指摘の項目は、第3次亀岡市環境基本計画にも記載があるため、所管部署から情報は共有されている。同計画またはかめおか脱炭素未来プランどちらの報告事項とするかは検討させていただきたい。

##### 委員

太陽光発電の補助金交付件数の目標100件について、募集件数か交付件数か分かるようにしてほしい。

##### 事務局

国・府の補助金と関連するため、毎年度枠が変動する。現状、募集件数も100件に届いていないが引き続き要望していく。表現方法については検討したい。

##### 委員

電気自動車の普及について、搭載されているバッテリーを充電する際に、太陽光発電を使用しなければ環境価値がない。太陽光発電設備と電気自動車、その蓄電池として利用を一体的に導入する場合を対象とした補助制度が効果的なのではないか。

##### 事務局

本市の温室効果ガス排出量で運輸部門が多くを占めていることもあり、再生可能エネルギーを活用したEV蓄電池の導入は非常に効果的であると考えている。

国の方針等も影響する分野のため、全体の動きを見定めながら、クリーンな電力を使ったEV活用や自家消費の拡大を目指していきたい。

#### 4 講演

##### 「企業・行政などの各分野におけるサーキュラーエコノミーの活動事例紹介について」

《株式会社ごみの学校 代表 寺井正幸氏による講演》

#### 委員

市ではペットボトルのリサイクルを目指しているが、大量消費社会ではペットボトルの削減が難しいと感じている。個人的なレベルではマイボトル持参は可能だが、社会全体でペットボトルの使用を減らすアイデアはあるか。

#### 委員

昔は1リットル以上のペットボトルしか製造できなかったが、近年、少ない容量のペットボトルが大量に流通するようになった。持ち運びが楽になり、さらにペットボトルに頼るようになったのではないか。

#### 講師

ペットボトルの大量商品に矛盾を感じる中で、新たな文化を提案しようと「マイボトル」という言葉が生まれた。ペットボトルの使用が文化になっているのであれば、逆にマイボトルを使う新しい文化を作り、社会に浸透させていくことも可能ではないか。マイボトルのような分かりやすく受け入れられやすい言葉があることで、技術などに関係なく習慣化していくと思う。

ペットボトルの容量については、飲料メーカーの動向がポイントかと思う。

#### 委員

消費者のニーズが関係しているのか。

#### 講師

企業としては利益の大きいほうに流れていく。一方、市民の意見にも左右されるため、新しい習慣を作ることで変えていける可能性がある。

#### 委員

例えば、亀岡市では1リットル以下のペットボトルの販売を禁止するというのはどうか。不便を感じればマイボトルを持参すればよいのではないか。

#### 講師

亀岡市にはプラスチック製レジ袋を禁止した前例もあるため、何か新しいチャレンジができるのではないかと我々も期待している。

## 委員

昔はペットボトルは埋め立てごみとして扱っていた。当時は違和感がなかったが、今はリサイクルが当たり前で時代とともに常識も変わってきている。

サーキュラーエコノミーの実現には経済や社会など様々なものの変革が必要かと思うが、実現可能性をどうみているか。

## 講師

できる、できないという文脈ではなく、社会全体として自然とサーキュラーエコノミーの実現の方に動いていくのではないかと考えている。中長期的な視点でみると、自然や資源のあり方に人間の方があわせて生活してきた歴史がある。地球の変化に人間がどのように対応するかが重要となってくる。

## 委員

プラスチック文化から脱却するために紙文化に変えるべきだと考えるか。

## 講師

一概に比較できない問題であるが、どちらも使い捨ててしまうと資源の枯渇につながる。現在、日本国内で使用されている紙は外国製が主流だが、他国で大量に伐採されて森林破壊につながるようでは紙にシフトする意味がない。どの素材をどう調達してどう製造するかという全体の仕組みの中で考えなければならない。

## 委員

環境問題は人間の人口と密接に関係しているのではないか。サーキュラーエコノミーを進める上で、市町村の人口規模はどのくらいが適切か。

## 講師

産業が創出できないとサーキュラーエコノミーの「エコノミー」の部分が成り立たない。一定の産業ができる規模と幅広い年齢層がいる流動性のある地域が望ましい。

## 5 副会長挨拶

## 6 閉会

以上